

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:1.

手術室看護師の安全意識向上にむけての取り組み -KYTを実施して-

伴野 洋子, 井戸川 みどり

手術室看護師の安全意識向上に向けての取り組み -KYT を実施して-

旭川医科大学病院手術部ナースステーション

○伴野 洋子 井戸川 みどり

【はじめに】平成 27 年上半期、A 病院手術部では、確認不足・知識不足によるインシデントが約 45%発生した。要因として、患者状態からのリスク予測不足、技術の経験不足などが考えられた。A 病院手術部では、ダヴィンチ手術・ハイブリッド手術などの先進医療、高齢者や重症例の手術が増加している。また、手術部経験年数 1~2 年目の看護師が 1/3 を占めているという現状にもある。患者に安全・確実な看護を提供するためには、手術室看護師の安全意識の向上が不可欠であり、教育的視点での関わりが必要であると考えた。そこで、危険予知トレーニング（以下、KYT とする）を企画し、手術室看護師が、日々のケアに多くの危険が潜むことの認識に繋がったため、報告する。

【目的】KYT を理解し、日々のケアの側面に潜むリスクを認識・予測することができる。

【実践方法】 1. 対象：手術室看護師 45 名。
2. 実践内容：①KYT 実施の一週間前、KYT の基礎知識や進め方について概念学習会を実施する。概念学習会の資料は、いつでも見直しができるようナースステーション内に設置する。② KYT の題材は、平成 27 年度に発生したインシデントの中から、振り返りや確認が必要であると判断した事例を選択する。③KYT を実施し、立案した安全行動目標をポスターにまとめ、朝夕のカンファレンスでアナウンスする。④2 回の KYT 終了後、KYT の理解やリスク予測についてアンケートを実施し、集計する。⑤下半期のインシデント内容を集計する。

【倫理的配慮】アンケートの趣旨を口頭、書面で説明し、アンケート回収をもって同意を得たこととする。

【結果】①KYT は 2 回実施し、参加者は計 34 名（76%）であった。②KYT1 回目は「輸血搬送時の場面」、所要時間約 40 分、3 グループに分か

れ、安全行動目標を「患者が確認できる媒体を準備し、輸血を運ぶ側、受け取る側ともに患者の氏名を確認する」「患者氏名を声出し確認する」と立案した。③KYT2 回目は「手術安全チェックの一場面」、所要時間約 15 分、2 グループに分かれ、安全行動目標を「手を止めて、大きな声で手術安全チェックし、みんなで情報を共有しよう」と立案した。②アンケートは、回収率 100%であった。結果は、KYT が理解できた・概ねできた 36 名（80%）、危険を明らかにすることができた・概ねできた 35 名（78%）、具体策をあげることができた・概ねできた 35 名（78%）、安全行動目標が言える・概ね言える 43 名（95%）であり、自由記載では、常に危険がそばにあると認識することができた（12 名）、KYT 後は自分の行動を意識し、安全について考えるようになった（10 名）、危険を意識できるよう繰り返し学習することが大切である（4 名）などの回答があった。③下半期の確認不足・知識不足によるインシデントは約 20%発生した。

【まとめ】杉山は、「KYT を繰り返す効果は、事例ごとの危険因子や対策を学ぶというよりも、多くの危険が潜んでいることに、自分自身が気づくようになることである」¹⁾と述べている。手術室看護師は、KYT で自らの行動を振り返ることにより、常に身近にリスクが潜んでいることを認識し、KYT を繰り返し実施する効果を感じていた。KYT を定期的に行い、リスク感性を向上することは、安全を考慮した先取り介入も可能となると考える。今回の KYT は、全員が参加することができなかった。今後は KYT を短時間、且つ全員が参加できるような方法を構築し、定着させていく必要がある。

【引用文献】

1) 杉山良子：ナースのための危険予知トレーニングテキスト，メディカ出版 10，2012